

主語不一致ジェロンディフについて

渡邊 淳也

(筑波大学)

研究対象は、意味上の主語が、ジェロンディフ句がかかってゆく先の節（「支配節」(proposition régissante) とよぶ）の主語と同一指示でないジェロンディフ（「主語不一致ジェロンディフ」とよぶ）である。「L'appétit vient en mangeant」(Rabelais) がもっともよく知られた例であろう。この種のジェロンディフは、ときおり、固定表現において許容されるといわれるが、実際には一定の生産性があり、実例は存外よく出てくる。そこで、どのような条件のもとで主語不一致ジェロンディフの生起が可能になるかを考えたい。

Legendre (1989)、Reichler-Béguelin (1995)、Haspelmath (1995)、Halmøy (2003)、木内 (2005)、ロドリゲス (2006) などの先行研究で提出された説を検討すると、それぞれにもっともな点はあるものの、観察の範囲をひろげてゆくと、仮説が適用できない例があらわれる場合が少なくない。本研究では、なるべく新たな反例に足をすくわれることがないように、コーパス調査を実施し、多様な実例を収集したうえで、論を起こすこととした。

14 か月にわたって実施した調査で、全体としては 35475 例のジェロンディフに目を通し、1483 例の主語不一致ジェロンディフを発見した (不一致生起率 4.2%)。そのなかで、ジェロンディフにおかれた動詞が心理・認知動詞 (verbes psycho-cognitifs) の場合、不一致生起率が 12.7% と突出して多かった。また、支配節の動詞の語彙的アスペクトは、非有界 (non-borné) のものが 1106 例 (74.6%) と、約 4 分の 3 を占めた。

さらに、支配節の統辞的特徴など、実例の観察を糾合した結果、主語不一致ジェロンディフには、支配節で原則として観察者 (または知覚者、経験者) が表現されず、観察 (知覚、経験) された内容のみが表現されるという特徴があり、近年さかんに研究されている認知モード論でいう「I モード」の表現であるという結論にいたった。